

常設企画展 近代名古屋の日本画界

令和 7 年（2025）9 月 27 日（土）～12 月 7 日（日）

【前期】9 月 27 日（土）～11 月 3 日（月・祝）
【後期】11 月 5 日（水）～11 月 27 日（日）

明治維新によって、日本画は急速な近代化の波に襲われました。その中心となった東京・京都に対して、中京地域は東西の影響を受けながらも、しばらくは江戸からの連続を引き継ぐかたちで推移していきました。その中心となったのが、明治 16 年（1883）に結成された日本画団体・同好社（明治 31 年〔1899〕に同好画会と改称）でした。愛知県博物館内の龍影閣を拠点とした同好社（同好画会）は、定期的な展覧会だけでなく、東西の画家を招聘しての共進会などを主催するなど、中京地域の美術団体として中心的な役割を果たしました。

そうした状況に転機が訪れたのが、明治 43 年（1910）の第十回関西府県連合共進会と、その付帯事業として開催された名古屋開府三百年記念新古美術展覧会でした。新古美術展は、当初は同好画会展として企画されましたが、同年に落成した愛知県商品陳列館を借用するにあたり、借用料を無料にする条件として全ジャンルの美術品の展示を提示されたことから、古美術、洋画、工芸などを含めた総合美術展として開催されることになりました。なお、この時に古美術分野で尾張徳川家の宝物が多数展示されたことが、昭和 5 年（1930）の徳川美術館開館の契機の一つとなりました。新古美術展を期に、同好画会は洋画、工芸分野を加えた日本初の民間総合美術団体「東海美術協会」へと発展的解消をしました。東海美術協会は愛知県商品陳列館内に事務所を置き、毎年公募展を開催するだけでなく、古美術や西洋美術の展覧会・講演会を企画運営するなど、戦前の中京地域の美術界を長く支えた美術団体でした。

本展では、全体を二章に分け明治末期から昭和初期までの中京地域の日本画界を総覧し、中京画壇がいかにして近代化の道を辿っていったかを見ていきます。

第一章「名古屋開府三百年と中京画壇の成立」では、名古屋開府三百年記念新古美術展覧会に出品した日本画家たちを中心に紹介します。一部を除き、現在ではほとんど知名度に乏しい画家ばかりですが、当時はこうした画家たちが精力的に活動し、中京地域の美術界を盛り立てていました。

第二章の「東海美術協会と次世代の日本画家たち」では、新古美術展覧会を機に結成された日本初の総合美術団体・東海美術協会の活動と、大正・昭和戦前期に名古屋を中心に活躍した次世代の日本画家たちを紹介します。また、中京画壇発展の大きな契機となった昭和 3 年（1928）の御大典奉祝名古屋博覧会の資料など、当時の中京画壇を取り巻く状況がわかる資料も併せて展示します。

本展で紹介する画家の中には、名古屋市美術館で初めて取り上げる画家も少なくありません。およそ百年前の名古屋を中心に活躍した日本画家たちの作品によって、当時の名古屋の日本画界の様子に思いを馳せていただければ何よりです。

※本企画展では「名古屋」というタイトルを便宜上使っていますが、「東海美術協会」や後述の「中京美術院」と言った団体の呼称からは、名古屋という限定的な地域に留まらず、愛知・岐阜・三重など周辺地域を包括した画壇意識を感じ取ることができます。そのため、本企画展の解説では、当地を指す言葉として原則「中京地域」の呼称を用います

第一章 名古屋開府三百年と中京画壇の成立

本章では、明治 43 年（1910）に開催された「名古屋開府三百年紀年新古美術展覧会」の目録に名前が見える日本画家を中心に紹介していきます。紹介する画家の多くは同好社（同好画界）と後継団体である東海美術協会に所属していました。

奥村石亭は明治期の中京日本画壇で中心的な役割を担った四条派の画家・奥村石蘭の長男です。小寺雲洞もまた石蘭に学んだ画家であり、新古美術展では石亭と共に審査員を務めました。同じく審査員の渡邊秋溪（谿）は久保田米僊が来名時に開いた仙洞画塾を引き継ぎ、藤島華僊はその補佐をしました。米僊に学び、名古屋で活動した画家として他に大矢米年がいます。

中京地域では他にも江戸時代の中京画家たちの伝統を引き継いだ画家がいました。山本梅逸、中林竹洞に私淑した毛利梅友は、田能村直入に師事し、後に日本中央南宗画会を立ち上げました。兼松蘆門は四条派、南画を修めただけでなく、『日本画治革史』といった研究書を執筆するなど、研究者としての側面を持つ画家です。さらに、当時の中京地域で精力的に活動したのが張月樵の孫弟子である織田杏齋を中心とした南北合派です。甥の織田旦齋、弟子の石河有鄰など、師の杏齋の画風を引き継いだ画家や、石河の弟子で東西の近代化の傾向を早期に取り入れた水谷芳年といった画家が活躍しました。

他に、徳川美術館初代館長・熊沢五六の父で、医業の傍ら独学で日本画を学んだ熊沢古蓬、四条派、南北合派を学び、鹿を得意とした波多野一岳、池上秀畝に学び鯉を得意とした松田杏亭、同じく秀畝に学び鶴を得意とした狩野梅齋など、この時期の中京地域では様々な日本画家が活動していました。

また、中京画壇を語る上で欠かせないのが、森村宜稻を中心とした復古やまと絵の系列と、山本梅莊を中心とした梅莊派の系列です。森村宜稻は田中訥言、浮田一蕙に私淑し復古やまと絵の伝統を引き継ぎ、稻香画塾を開き多くの弟子を育てました。その弟子の中には第二章で取り上げる森村稲門（宜永）、林雲鳳、山田秋衛などがいます。梅莊派については、今回は作家・作品を取り上げることはできませんでしたが、半田を拠点に活動した南画系の画家一派で、中京地域で大きな影響力を持ちました。また梅莊自身も大正 3 年（1914）から文展の審査員を務めるなど、全国的にも存在感を放ちました。

こうした日本画家たちの多くは東海美術協会に所属し活動を展開しました。東海美術協会は民間団体ではありますが、会長を愛知県知事、副会長を商工会議所会頭が務め、名古屋市が補助金を出すなど、現在でいう第三セクターに近いものでした。明治 44 年（1911）から開催された東海美術協会展は、官展の中京地域版とでも言うべき性格を持つものであり、東海美術協会の発足により中京画壇の基礎が整ったと言えるでしょう。また同じ明治 44 年には、江戸時代以降の中京地域の美術を日本画家中心に流派ごとに紹介した『古今中京画談』（第二章で展示）が刊行され、中京地域の美術界は大きな盛り上がりを見せました。

しかし、明治末時点では、中京画壇の近代化は限定的なものでした。中京画壇の本格的な近代化の時期は、大正 7 年（1918）に結成された愛知社、愛土社（第二章で紹介）が本格的に名古屋で展覧会を開催した、大正後期ごろに置くことができるでしょう。

第二章 東海美術協会と次世代の日本画家たち

明治 43 年（1910）に発足した東海美術協会は、毎年の公募展以外にも古美術の展覧会や講演会などを定期的に開催するなど、中京地域の美術振興に大きな役割を果たしました。一方で、この時期の名古屋には美術学校が存在せず、中京地域の日本画家志望の若者は、多くが明治 42 年（1909）に開学した京都市立絵画専門学校に進学しました。初期の中京圏からの進学者には、在学中に文展に三回連続入選し、若くして台頭を表しながらも大正 10（1921）年に早逝した水野清亭がいました。

この時期の中京画壇で大きな役割を果たした画家として、大正元年（1912）に姫路から名古屋に移住した朝見香城がいました。竹内栖鳳の門下である森月城や西山翠嶂に日本画を学んだ朝見は、大正 5 年から東海美術協会展の審査員を務め、また、東海美術協会の事務局に併設された中京文展出品協会（大正 8 年からは帝展）では理事を務めるなど当時の中京画壇を牽引した若手画家でした。しかし、中京画壇全体を見ると、大正 10 年の第 3 回帝展では、中京地域からの出品作が全て落選するなど、中京画壇の東西に対する遅れが顕在化していきました。

こうした中京地域の停滞を打破した絵画団体の一つが、佐藤空鳴、織田杏逸、石川英鳳といった京都市立絵画専門学校の中京出身者たちが結成した「愛土社」でした。大正 7 年（1918）結成の愛土社は、大正十年に名古屋市内で初の展覧会を開催しました。愛土社には近藤白鳳、大岩聚星、浅井正臣といった同校の後輩も参加しました。彼らの多くは卒業後に帰郷し、東海美術協会にも所属しながら活動をしました。また、朝見香城も大正 11 年（1922）に土田麦僊門下の喜多村麦子、

山元春拳門下の渡辺幾春、独学で日本画を学んだ横山葩生らと白鳥社を結成、翌大正 12 年には愛土社の近藤白鳳、織田杏逸を加え中京美術院を結成しました。こうした当時 20～30 代の画家たちの台頭により、中京画壇は急速に近代化を遂げることになりました。彼らの多くは、中京地域で活動しながら、京都の西山翠嶂の画塾・青甲社にも所属していました。

一方で、当時の若手日本画家は東京に学ぶことも少なくありませんでした。大正 7 年（1918）に愛知県出身の在京画家を中心に結成された愛知社が、帝展の気風を定期的に名古屋に伝えたのもその一因でしょう。愛知社の日本画同人としては、池上秀畝門下の富田范溪、松岡映丘門下の服部有恒、川合玉堂門下の清水有聲などがいました。こうした画家たちは東京をその活動の中心としましたが、例えば池上秀畝門下では前章で紹介した松田杏亭、松岡映丘門下では森村稻門（宜永）、林雲鳳、山田秋衛、川合玉堂門下では平岩三陽のように、帰郷して活動した画家も少なくありませんでした。特に林や山田は、歴史画制作のために培った有職故実の知識を活用し、戦後の名古屋市の文化財行政にも携わりました。

大正後期以降、中京画壇は急速に発展を遂げますが、中京地域には依然として専門の展示施設としての美術館がありませんでした。そうした状況に変化が訪れるのが昭和 3 年（1928）に開催された御大典奉祝名古屋博覧会でした。この時、バビリオンの一つとして中京地域初の美術館が建設され（鶴舞公園美術館）、博覧会終了後も巡回展や公募展の会場として重要な役割を果たしました。翌昭和 4 年には名古屋主催の名古屋市民美術展が発足するなど、中京美術界はますますの盛り上がりを見せるようになりました。

第一章 作品リスト

番号	作者	作品名	所蔵	制作年和暦	制作年西暦	品質	期間
資料 1		第十回関西府県連合共進会全図	個人蔵	明治 43 年	1910	印刷物	通期
資料 2		名古屋案内	個人蔵	明治 43 年	1910	印刷物	通期
資料 3		新古美術展覧会案内図	個人蔵	明治 43 年	1910	印刷物	通期
資料 4		絵葉書	個人蔵	明治 43 年	1910	印刷物	通期
1	織田杏斎	桐隠読書図	鱒庵コレクション	明治 35 年	1902	絹本墨画淡彩	通期
2	石河有皐	巖上孔雀図	名古屋市美術館	大正 12 年	1923	絹本着彩	通期
3	水谷芳年	花鳥図屏風	名古屋市美術館	大正	1920c.	絹本着彩	通期
4	渡辺秋溪（秋谿）	富岳憧憬之一白糸瀑布図	鱒庵コレクション	明治 44 年	1911	絹本墨画淡彩	通期
資料 5	渡辺秋溪（秋谿） 著	富岳百景画譜	個人蔵	明治 41 年	1908	書籍	通期
5	藤島華僊	羅漢図	鱒庵コレクション	大正 7 年	1918	絹本着彩	通期
6	大矢米年	呉道玄筆画龍上天図	鱒庵コレクション	大正 13 年	1924	絹本着彩	通期
7	兼松蘆門	梅林之図	鱒庵コレクション	明治 44 年	1911	絹本墨画淡彩	通期
資料 6	兼松蘆門 著	日本画沿革史 竹田と華山 竹洞と梅逸	個人蔵 個人蔵 名古屋市美術館	明治 38 年 明治 39 年 明治 44 年	1905 1906 1911	書籍	通期
8	小寺雲洞	雨中渡船図	鱒庵コレクション	大正～昭和	1910～20c.	絹本着彩	通期
9	奥村石亭	月次山水図屏風	名古屋市美術館	大正	1910c.	紙本墨画淡彩	通期
10	熊沢古蓬	勁翮排霜図（鷹野猛威）	名古屋市美術館	昭和 2 年	1927	絹本着彩	通期
11	毛利梅友	玉野霜後	個人蔵	大正～昭和	1920～30c.	絹本着彩	通期
12	松田杏亭	双鯉図	名古屋市美術館	戦後	1950c.	絹本着彩	通期
13-1	波多野一岳	新緑之図	鱒庵コレクション	大正～昭和	1920～30c.	絹本着彩	前期
13-2	狩野梅斎	梅花双鶏図	鱒庵コレクション	大正～昭和	1920～30c.	絹本着彩	後期

第二章 作品リスト

番号	作者	作品名	所蔵	制作年和暦	制作年西暦	品質	期間
資料 1	田部井竹香 著 野崎華年 装丁	古今中京画壇	個人蔵	明治 44 年	1911	書籍	通期
資料 2	東海美術協会	東海秀美帖 前期：狩野梅斎／大岩聚星 後期：青木栖古／横山葩生	名古屋市美術館	昭和 4 年	1929	紙本着彩 前後期入替	通期
資料 3		第 19 回東海美術協会展覧会目録	個人蔵	昭和 4 年	1929	印刷物	通期
1-1	水野清亨	春麗	名古屋市美術館	大正 3 年	1914	絹本着彩	前期
1-2	石川竹邨	初夏竹垣遊禽図屏風	個人蔵	大正	before1923	絹本着彩	後期
2-1	佐藤空鳴	晩春（分譲地風景）	名古屋市美術館	昭和 4 年	1929	絹本着彩	前期
2-2	大岩聚星	春趣二題	鯉庵コレクション	大正 15 年	1926	絹本着彩	後期
3	織田杏逸	葡萄之図	鯉庵コレクション	昭和 5 年頃	1930c.	絹本着彩	通期
4	近藤白鳳	葉蔭育雛	鯉庵コレクション	大正～昭和	1924～27c.	絹本着彩	通期
5	浅井正臣	叭々鳥	鯉庵コレクション	昭和 10 年頃	1935c.	紙本墨画淡彩	通期
6	石川英鳳	紅花白鳥	鯉庵コレクション	昭和 2 年	1927	絹本着彩	通期
7	朝見香城	海苔採り	鯉庵コレクション	大正 14 年頃	1925c.	紙本着彩	通期
8	横山葩生	晴れたる日	名古屋市美術館	昭和 11 年	1936	紙本着彩	通期
9	渡辺幾春	蓄音機	名古屋市美術館	昭和 8 年	1933	絹本着彩	通期
10	喜多村麦子	暮れ行く堀川	名古屋市美術館	昭和 3 年	1928	絹本着彩	通期
資料 4		御大典奉祝名古屋博覧会鳥瞰図	個人蔵	昭和 3 年	1928	印刷物	通期
資料 5		御大典奉祝名古屋博覧会絵葉書	個人蔵	昭和 3 年	1928	印刷物	通期
資料 6		御大典奉祝名古屋博覧会美術展 出品目録	個人蔵	昭和 3 年	1928	印刷物	通期
資料 7		御大典奉祝記念菓子皿 （日本陶器〔現：ノリタケカンパ ニーリミテド〕製）	個人蔵	昭和 3 年	1928	陶器	通期
資料 8		《暮れ行く堀川》陳列通知	名古屋市美術館	昭和 3 年	1928	印刷物	通期
資料 9		《暮れ行く堀川》絵葉書	名古屋市美術館	昭和 3 年	1928	印刷物	通期
11	富田范溪	麦畑	名古屋市美術館	昭和 8 年頃	1933c.	絹本着彩	通期
12-1	平岩三陽	山は粧ふ	名古屋市美術館	昭和 12 年	1937	紙本着彩	前期
12-2	清水有聲	椿咲く島	名古屋市美術館	大正 9 年	1920	絹本着彩	後期
13-1	林雲鳳	玄上	名古屋市美術館	昭和 4 年	1929	絹本着彩	前期
13-2	服部有恒	業平観梅	名古屋市美術館	昭和 5 年頃	1930c.	紙本着彩	後期
14-1	山田秋衛	竜宮城図屏風	名古屋市美術館	昭和 2 年頃	1927c.	絹本着彩	前期
14-2	森村稲門（宜永）	合戦図	名古屋市美術館	昭和前半	1920-30c.	紙本着彩	後期

関連イベント

コレクション解析学「東海美術協会の日本画家たち」

東海美術協会の画家たちが熊沢古蓬(1861-1934)のために描いた画帖
「東海秀美帖」から、当時の中京画壇を掘り下げていきます。

日時：11月29日（土） 14:00～15:30（約90分）

講師：近藤将人（当館学芸員）

会場：名古屋市美術館 2 階講堂

定員：180 名（当日先着順、定員になり次第締切）

料金：無料

解説リーフレット

本企画展の開催に合わせて、名古屋市美術館の中京画壇コレクションを紹介するリーフレットを作成しました。常設企画展会場およびコレクション解析学の会場で配布しますが、部数に限りがあります。

公式ホームページで電子版を公開していますので、可能な限り電子版での閲覧にご協力ください。下記の二次元バーコードからもアクセスできます。ページ内にある「解説リーフレット」のボタンから閲覧ください。



中京画壇関連年表

西暦	和暦	中京画壇に関する出来事
1878	明治 11	織田杏斎が『北斎漫画』15 編（完結編）に際し、足りない下絵を補うため多数の模写を行う
1883	明治 16	同好社設立（葦原眉山、木村金秋、奥村石蘭、小田切春江）
1886	明治 19	久保田米僊、名古屋で仙洞画塾を開く
1887	明治 20	木村金秋・小田切春江が『凶荒図録』刊行
1889	明治 22	渡辺秋溪（谿）京都府画学校の教師に／東京美術学校（現東京藝術大学）開学
1898	明治 31	渡辺秋溪（谿）同好社の理事に／藤島華僊が帰名
1899	明治 32	同好画会設立
1905	明治 38	兼松蘆門『日本画治革史』刊行
1909	明治 42	京都市立絵画専門学校（現京都市立芸術大学）開学
1910	明治 43	第十回関西府県連合共進会開催、付帯事業として名古屋開府三百年紀年新古美術展覧会が愛知県商品陳列館で開催 東海美術協会設立
1911	明治 44	田部井竹香著『古今中京画壇』刊行／第 1 回東海美術協会展
1912	明治 45 大正元	朝見香城が名古屋に移住
1914	大正 3	山本梅荘が文展審査員に
1918	大正 7	愛知社結成（川崎小虎、富田范溪）／愛土社結成／国画創作協会結成
1919	大正 8	第 1 回愛知社展
1921	大正 10	帝展日本画部で中京出品作が全落選となる／青甲社設立、佐藤空鳴、朝見香城が初期塾員に
1922	大正 11	第 1 回愛土社展／白鳥社結成
1923	大正 12	関東大震災に伴い平岩三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に疎開
1924	大正 13	白鳥社解散、中京美術院結成
1925	大正 14	石川英鳳が蓬萊画塾を設立
1926	大正 15	織田杏逸編『杏斎遺墨帖』刊行
1928	昭和 3	御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に
1929	昭和 4	名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門部市長賞に 松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催
1930	昭和 5	鶴舞公園美術館が名古屋市内に寄贈／第 5 回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に
1931	昭和 6	嶋谷自然が青甲社に入塾
1933	昭和 8	名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第 23 回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘
1934	昭和 9	青樹社設立、横山葩生が顧問に／東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示
1935	昭和 10	熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門（宜永）も参加
1936	昭和 11	平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催／愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明（後に再出品） 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫／我妻碧宇が名古屋に定住
1937	昭和 12	名古屋汎太平洋平和博覧会開催
1938	昭和 13	森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に
1940	昭和 15	森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂（麦子）、森村宜永が大稲会を結成
1942	昭和 17	鶴舞公園美術館が解体／名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋総合芸術展開催
1943	昭和 18	第 6 回新文展で我妻碧宇《林間》が中京在住日本画家初の特選に